

大原魚山大原寺里坊の調査・研究

鈴木久男
浅子里絵
内藤唯

はじめに

大原は周囲を山々に囲まれた東西約900m、南北約2400mほどの山里である。里内には天台宗の寺院が点在する。北東には魚山大原寺ぎょざんだいげんじの法灯を継承する勝林院・宝泉院・実光院が、その南東には来迎院・浄蓮華院・蓮華院が、そのなかほどに三千院や念佛寺などが位置している。加えて北西方には寂光院が谷間に建立されている。これらの寺院は、大原を南北に貫く高野川や国道367号線(若狭街道)より一段高い山麓に建立されている。

平成25年(2013)勝林院は開創一千年紀の節目にあたることから、10月に慶讃法要が2週間にわたり催行された。京都産業大学むすびわざ館ギャラリーは、この記念法要に合わせて同年9月から10月にかけて「京都大原勝林院の仏教文化と歴史」展を開催し、今まであまり知られていなかった勝林院蔵の文化財を紹介することができた。

さて本稿は、平成25年以降に実施した勝林院周辺部で明らかにした大原寺関係の遺構や遺物の調査成果を紹介する。なお、執筆分担は文末に記した。

I 既往調査成果

地割の想定

旧勝林院境内を復元する過程で、大原寺の造営は無計画でなく一定の規範のもとに実施された⁽¹⁾と考える。以下の3項目に注目し、まとめたものが復元

案の図1である。

- 1 現勝林院本堂が建立されている平坦地では、東西幅が40mに近い数値が数箇所得られたこと。また、来迎橋から魚山橋間では、40mの5倍にあたる200mが計測されたこと。
- 2 加えて勝林院本堂の中線と魚山橋を結んだラインの方向は、勝林院造営時の基準方位を今に伝えていると想定した。勝林院正面から南進する南北道路は、平安・鎌倉時代から方位を継承していると推定した。すなわち地割に最も影響をあたえたのは勝林院である。
- 3 現勝林院本堂は幾度も修築されているが、位置と建物軸は創建当初から余り変化していないと仮定した。

このような条件をもとに作成したのが図1である。ここで注意しなければならないのは、復元図の状況は短時間に成立したものでなく、平安時代・鎌倉時代と徐々に整えられていったものと考えている。すなわち寂源が勝林院を創建(1013)する以前、すなわち慈覚大師円仁が大原の地に天台声明の道場を造営したようであるが、この時期の諸堂は、独立性が強かったと想像する。しかしながら寂源の勝林院造営を契機に、一定の指針の下に寺院整備がなされたものと考えた。

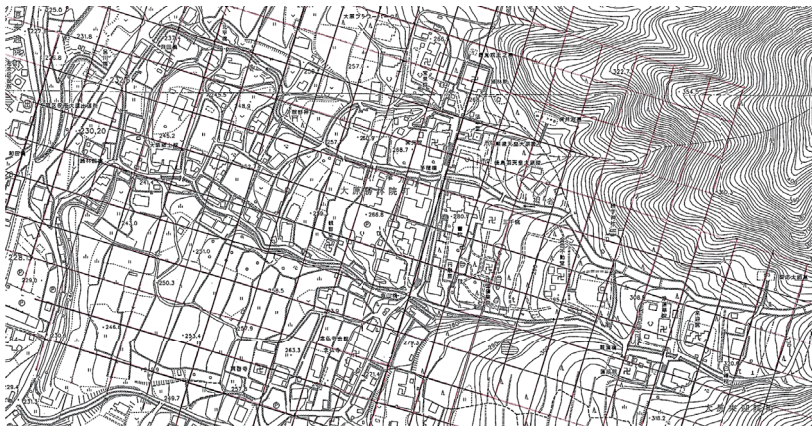


図1 地割想定の復元案 (方眼は40m)

勝林院の立地環境

勝林院本堂周辺部の立地環境について述べる。本堂は境内地のほぼ中央部に位置し、敷地は概ね広さは東西 60m、南北 60m の規模である。

その場所はほぼ谷底にあたる。このことは、律川に架かる萱穂橋から北方を望むと確認できる。境内地で最も低位に位置するのは本堂西隣の宝泉院(坊)である。本堂との高低差は 3m を測る。しかも敷地の境界には北から南進する谷川が流れている。

すなわち本堂と宝泉坊は、東から西へと延びる谷筋内にあたり、北側の尾根裾を掘削し敷地を造成したことがわかる。そのため本堂や宝泉院は、谷水に悩まされていたことは想像に難くない。勝林院境内で最も高所は、大原陵(後鳥羽天皇・順徳天皇)や旧実光坊である。ここからは、里の西側が一望できる。

本堂境内の敷地は、本堂・宝泉院は谷筋の北側斜面を掘り下げているが、新旧実光院・普賢院・理覚院は、谷筋南の尾根を雛壇状に掘削した造成地に建立されている。

律川は勝林院境内の南限であり、本堂から仰ぎ見る尾根上の北縁を東から西へと流れている。この律川は勝林院が建立されるまでは、本堂南端の谷川(三途の川)に架けられている来迎橋付近を東西に流れていたと推定する。律川は、三千院境内に安置されている翁地藏の付近から流れを谷筋から尾根上へと急に変化する。この状況は、勝林院の造営時に流れを人工的に付け替えたと考えている。その目的は 2 つあったと思われる。前者は勝林院の本堂や境内を谷川から守るためである。後者は、尾根上を流すことにより、谷水を生活水や農地の用水として利用することにあると思われる。

宝泉院北方の平坦地

平成 28 年、宝泉院の北側、聖谷墓地の南側にある杉林には大規模な平坦地の存在を指摘した。その後実施した調査でおおよその範囲や周囲の様子を明らかにできた。平坦地は方形に区画され雛壇状の法面で、一部であるが石積

を確認した。遺構の時期を決定するための現地踏査を実施しているが、遺物は未だ発見していない。この平坦地と北側に位置する聖谷墓地との間には大きな谷筋によって南北に分かれている。なおこの墓地には梶井宮の墓地や鎌倉時代の宝篋印塔がある。以前に指摘したように、この平坦地は勝林院の旧境内地であること、聖谷墓地は勝林院と密接に関係する遺構であることは間違いない。



図2 宝泉院北側の平坦地（黄色部分）

呂川南岸の遺構

呂川の南岸にあたる尾根上で、里坊跡と思われる遺構を確認することができた。そして令和元年から2年の春にかけて、これらの遺構に伴うと推定する鎌倉時代から室町時代、さらに江戸時代の遺物を数箇所で見出した。

発見した場所は図3に示すように、来迎院・浄蓮華院・三千院がある尾根の南にある別の尾根である。現在尾根の北斜面には、呂川に面して蓮成院が建立されている。遺構と考える痕跡は東西150m、南北300mにおよぶ。東限

は概ね来迎院本堂の南方、西限は魚山橋から南進する道路まで、南限は呂川から南へ約 140 ～ 150m 付近を東西に流れる谷川である。

確認した遺構は、雛壇状に整然と並ぶ短冊形の平坦地とその法面周囲を施された石積、石塁、谷水を集める石組、池、土塁などである。ここでは平坦地と池について現状を述べる。



図3 呂川南岸の遺構位置図

短冊状の方形地割は、東端が蓮成院境内地の南東、西端はそこから西へ約 250m 離れた地点まで観察できる。正確な測量を実施していないため詳細は説明はできないが、平面形や規模はさまざまであるが、ある程度の規則性をもって区画されたことは確かである。ただし確実に建物礎石と判断できる遺構は、未検出である。

池は呂川のすぐ南側に位置し、西岸と北岸近くには、時期不明の高さ約 1 ～ 1.5m ほどの堤らしき痕跡がある。明治時代の地籍図に記されており、江戸時代以前の遺構である。略測であるが東西 24m、南北 13m 規模で、東西方向

に長い方形である。現在池にはほとんど水はなく、正確な深さは明らかでないが肩口から池底までは約 1m と思われる。池岸は周囲からの土砂が堆積しているため詳細は明らかでないが、護岸や景石などは今のところ未確認である。

地元の方のお話では、農業用のため池ではないかとのことであった。環境や位置、規模などから坊に伴う施設と考えたい。(鈴木)

発見した遺物

前述した呂川南岸の遺構より発見した遺物について紹介する。

図 4 では、遺物の採集位置を示した。その内訳は、須恵器 5 点 (P1、P2-1、2、P7、P8)、土師器 6 点 (P3-3、P5-1、2、P6-1～3)、磁器の 6 点 (P3-1、2、P4-1～3、P9)、陶器 1 点 (P2-3) の計 18 点である。

須恵器 P1 は東播製であると考えられる。こねばちの口縁部で、端部は外側

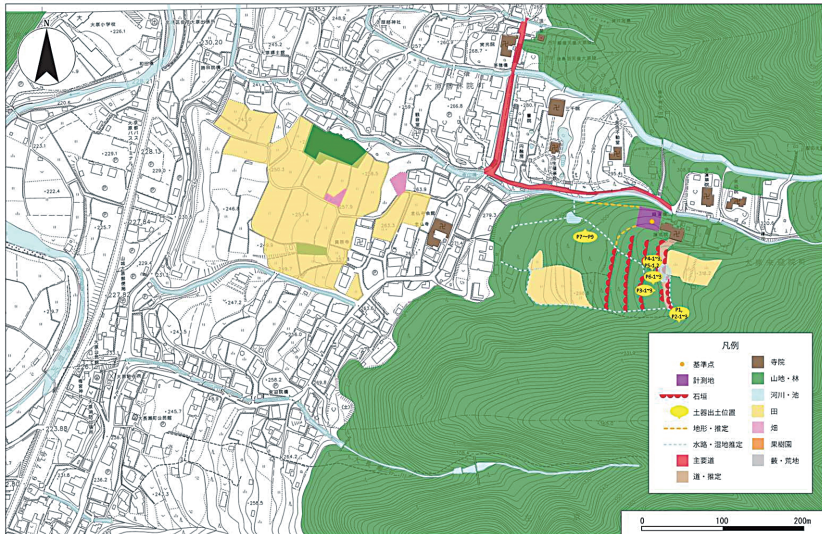


図 4 遺物採集位置図

に丸く肥厚している。使用により胎土中に砂粒を確認することができ、粗雑な作りといえる。須恵器 P2-1、2 は同一のこねばちの口縁部で、内側には使用痕が見られる。端部は外側に丸く肥厚している。須恵器 P7 は甕の胴部で、外側は平行叩きの技法を見ることができる。また、内側は摩滅し、胎土中に砂粒があることを確認できる（写真 1-3）。須恵器 P8 は口縁部の破片で、端部は外側に丸く肥厚している。

土師器 P3-3、P5-2、P6-1～3 は小片のため、詳細は不明である。土師器 P5-1 は口縁部の破片であると考えられる。

磁器 P3-1 は、青磁碗の口縁部の破片で、胴部外側に鎬連弁文が入っている（写真 1-1）。鎬連弁を表した碗は 13 世紀以降、南宋より大量に輸入されるようになり、この破片も同時期に輸入された遺物であると考えられる。磁器 P3-2 は、製作時の器面の劣化が著しい。磁器 P4-1 は、青磁で胴部の欠片である。胴部外側には把手が剥離した痕跡を確認できることから、器形は水差し等であると考えられる（写真 1-2）。磁器 P4-2 は青磁片であるが、小片のため詳細は不明である。磁器 P4-3 は、一部に青の斑点の文様を確認できる。磁器 P9 は、青磁片の底部とみられるが、一部に白の斑点の文様を確認できる。

陶器 P2-3 は小片のため詳細は不明である。

以上のように、この一帯で土師器や須恵器の破片を多数採取した。遺物の発見や、前述した遺構の痕跡より、この一帯に僧坊が広がっていた可能性があるかと推測できる。（内藤）

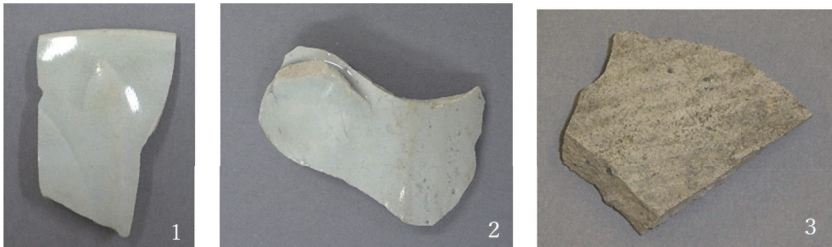


写真 1 発見した遺物

II 近世・近代の魚山大原寺周辺地域

1 名所案内記にみる大原

本章では近世の大原東部の大原寺を中心とした地域の様相について、江戸時代に成立した『都名所図会』⁽²⁾をはじめ、名所案内記の類を用いる。魚山大原寺は勝林院を本堂とする下院、来迎院を本堂とする上院にわかれ、かつては多くの僧坊が存在したといわれる。ここでは近世以降に成立した京都の観光地を紹介する名所案内記等の書籍を用いて、大原についての項目をみていく。これらの資料には洛中から大原までの距離や寺院また河川や橋の由来、縁起について述べられており、大原において勝林院・来迎院とはどのような場所であったのか考察したい。

1) 『都名所図会』・『拾遺都名所図会』

『都名所図会』大原の項については巻之三 左青龍に収められ、「大原は八瀬の北一里にあり若狭街道にして東西に八つの郷あり 端戸寺村 上野村 大長瀬村 来迎院村 勝林院村 井出村 野村 草生村」とある。続いて融通寺、魚山来迎院、音無瀧について記載されている。来迎院について「魚山来迎院ハ融通寺の東に隣る本尊ハ三尊にして中央ハ薬師佛 左釈迦 右阿弥陀 開基ハ良忍上人也此地ハ叡嶺西塔の北谷にて昔ハ坊舎百余宇有しなり魚山と号するハ漢土の天台山の西に大原魚山といふ此所も天台山の支山なれば此例によつてなづくとかや」とあり、注目すべきは大原の地にかつては坊舎が百余り存在したということである。挿図(図5)には図中左手前に勝林院の境内が描かれ、本堂上に「證據弥陀」の文字が記される。門の外に続く道は律川に架かる橋を渡り、極楽院⁽³⁾の前を通過して呂川に至る。呂川に沿う道を図の右手奥(東)に進むと融通寺、来迎院があらわれ、音無瀧に至る。

『拾遺都名所図会』⁽⁴⁾は『都名所図会』の後編として刊行されたものであり、巻之二 左青龍尾に記載がある。挿図には大原郷口として戸寺村、大長瀬村な

どを入れた広範囲が描かれている。文中には「萱穂橋」「来迎橋」「羅漢橋」という三つの橋の名があたり、「法然上人腰掛石」の記述がある。

2) 『洛陽名所集』

『洛陽名所集』⁽⁵⁾は『都名所図会』よりも成立年代が早い名所案内記である。大原については挿図から始まり、図の左奥（北）に描かれた勝林院本堂の上部に「せうこのあみだ」とあり、南側の門を出てすぐに川が流れて橋が架かっている。東側には「かちいの宮」と書かれ、三千院の前身である「梶井宮」であることがわかる。(図6) その前の道を図の右（南）に進むと呂川に行きつき、東へと進路を変えると「音なしの瀧」があらわれる。詞書にはまず大

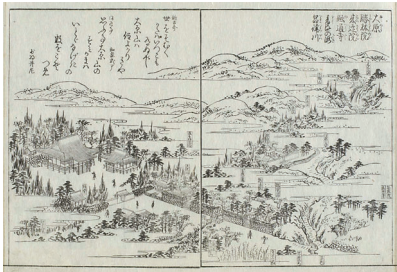


図5 『都名所図会』



図6 『洛陽名所集』



図7 『出来齋京土産』



図8 『京都府山城国愛宕郡大原村魚山之総図』

原について「此むらハ都城より三里余北のはてなり村ならびたるところなり」とある。「来迎院」の項に「世にこの院のほとけを證據乃阿弥陀とよべり」とあり、挿図には勝林院本堂の位置に證據阿弥陀の名を記載していることから、来迎院と勝林院の寺院名の混同、または両寺院を一括でみなしているのではないかと考えられる。「無明橋」の項には「来迎院の前なる橋や」とあるが、無明橋とは勝林院の南、律川に架かる未明橋のことである。勝林院の南側に存在する無明橋を「来迎院の前なる橋」と記載している点から、勝林院と来迎院の混同または一括していることが考えられよう。

3) 『出来齋京土産』

『出来齋京土産』の「大原」⁽⁶⁾についての項目には「都より三里なり八瀬よりハ一里なり」とある。「来迎院付無明橋」の項には「本尊ハ座像の阿弥陀なり證據の弥陀と号して」とあり来迎院についてではなく、勝林院の本尊證據阿弥陀仏と寺院前の律川に架かる無明橋について記述をしている。無明橋については「来迎院乃前なる橋をいふ 世に云つたふ罪障ふかき人の目にハ橋のしたにおそろしき大蛇ありとみられ」とあるが、この「来迎院」の部分も「勝林院」のことであり、罪業のある者は勝林院南にある無明橋に大蛇をみるといふ言い伝えを記している。挿画には「大原しやうこ」の文字に勝林院本堂らしき建物が描かれ、参詣者が律川に架かる無明橋らしき橋を渡ろうとしている。(図7)

4) 『名所都鳥』

『名所都鳥』⁽⁷⁾には「大原」と「呂律川」について記述がある。「大原」には「都より三里八瀬より一里北なり。およそ此むらに八郷あり。」と書かれ、「呂律川」には大原勝林院の前に南と北に二筋の川が流れ、呂川と律川と名付けられているとある。また「無明橋」の項目もあり、「北山大原證據乃弥陀棍井門跡の前」に架かっている小橋であると記載されている。

5) 『京羽二重』

『京羽二重』⁽⁸⁾には「来迎寺」「勝林寺」「融通寺」について記載があり、「勝林寺」には「證據之弥陀」の名がみられる。また「無明橋」には「北山大原證據の弥陀 梶井の宮の前ニ見られる小橋なり」とあり、橋について「罪惡の人間たちを渡らせずと云」と書かれている。

6) 『山州名跡志』

『山州名跡志』⁽⁹⁾は寺社や旧跡名所の由来や縁起をまとめた地誌であり、大原の項目の中に「魚山勝林寺」がある。その中で「萱穂橋」について「造惡不善の輩は渡ることを不得也」とあり、「来迎橋」は「切石橋有欄干銅擬宝珠在萱穂北二十間許。此橋郷中に有新死者葬送の時先づ此橋上に舁棺来て、堂の如来前に燈明を照して、本尊の御手糸と^{ゼンノツナ} 紼を結合せて修願回向するなり」とある。ここにある萱穂橋は律川に架かる橋で南の三千院側から渡る際は無明橋、北の勝林院側から渡る際は萱穂橋と呼ばれ、罪惡人はこの橋を渡ることができないのだとされる。

来迎橋は萱穂橋より北に20間ほど先にあると書かれており、これは勝林院門前の橋であることがわかる。紼とは善の綱のことであり、勝林院本尊である證據阿弥陀仏の手より延びている。

「来迎院」については大原声明の本山であったことと、「山門三千の徒有しときは、此所西塔の北谷の内にして、一百餘の僧房ありしとなり。」と記載され、比叡山西塔北谷に属しており、『都名所図会』同様、かつて大原には多くの僧坊が存在したとある。

7) 『京都府山城国愛宕郡大原村 魚山之総図』

図8『京都府山城国愛宕郡大原村 魚山之総図』⁽¹⁰⁾は明治期に製作された大原地域の銅版画であり、図は左側を北にし、最奥には北に比良山、中央に小野山、南に比叡山が描かれ、大原の位置する場所を示しており、その下には大原地

域を構成する社寺や僧坊の様子があらわされている。図の下部北には「勝林院通称證據阿弥陀堂」が描かれ、寺院の前には来迎橋が架かる。勝林院の西側には宝泉院があり寂光院道が続く。図の左下端には「呂律山念仏寺」と記載されているが、これはその後呂川の南側に移転をしている。

来迎橋から律川萱穂橋の間には東側に大原陵（後鳥羽天皇御陵・順徳天皇御陵）があり、そこに「実光院」の記載がみられる。実光院は大正8年（1919）に普賢院と理覚院を統合して図中に「普賢院」と記載がある場所に移転をする。また本図の中に理覚院の位置は示されていない。萱穂橋を南へ行くと三千院門跡の境内があり、寺域内に往生極楽院が描かれている。

呂川に沿う道を東に向かうと浄蓮華院が北側にみえ「融通大念佛再建地」と記載される。南には蓮成院、遮那院が続き、北東に来迎院、さらに北奥には音無瀧が描かれている。

詞書は「三千院門跡」「往生極楽院」「来迎院」「勝林院」について記され、明治期の大原魚山において重要であった寺院について述べているのだと考えられる。

ここまで魚山大原寺勝林院・来迎院を中心に名所案内記類をみてきたが、いくつかの記述は勝林院と来迎院を混同または一括りで表現をしているようであった。しかし案内記類で必ず取り上げられることから、大原東部の寺院群の中で魚山大原寺の上院・下院であるこの二寺が重視されていたことがわかる。また罪業のある者は大蛇を見たり、渡ることができないという無明橋（萱穂橋・未明橋）と、勝林院門前の来迎橋はいずれも勝林院の本尊證據阿弥陀仏を詣でるためには渡る必要があるものだった。大原東部地域の中で北の奥部に位置する勝林院を、阿弥陀仏のいる浄土と仮定するならば、これらは浄土へ渡るための架け橋と見立てられたと考えられよう。

2 官有地籍図にみる大原村

ここでは京都府立京都学・歴彩館所蔵「官有地籍図」を用いて明治期の大原についてみていく。「官有地籍図」は京都の葛野郡・愛宕郡・乙訓郡・宇治郡の一部について明治19年(1886)頃に作製され、里道、水路、畑など土地の情報が記載されている。大原については愛宕郡の中の大原村として「39甲[川西]」、「40乙[河東]」、「41丙[奥]」、「42[山地]」の四地域にわけられ、さらにその中で数枚に分割して絵図が存在している。

明治期の大原は大原八郷である来迎院村、勝林院村、草生村、上野村、大長瀬村、野村、井出村、戸寺村に加え、明治16年に北部の小出石村、百井村、大見村、尾越村が加わって、大原村を形成することとなった。四地域の「官有地籍図」にある【川西】【河東】の川(河)とは高野川を指し、「39大原村甲【川西】」には高野川の西側である草生村、野村の地域が描かれ、「40乙【河



図9 「官有地籍図愛宕郡 40 乙【河東】」京都府立京都学・歴彩館所蔵



図10 「官有地籍図愛宕郡41 丙 [奥]」京都府立京都市・歴史館所蔵

東]」には高野川東側の来迎院村、大長瀬村、上野村、戸寺村の地域が描かれている。「41 丙 [奥]」は勝林院村が描かれており、つまり魚山大原寺にあたる地域は「40 乙 [河東]」の北部 (図9) と「41 丙 [奥]」の南部 (図10) に描かれている。図9は北東に三千院の寺地が示され、門前の道を南に進むと呂川が流れる。呂川に沿う道を東へ進むと北に極楽院、浄華院、善逝院が並び、絵図の東端に来迎院の寺地が描かれている。道と呂川をはさんだ南側には字坊之上の地名がみられ、荒蕪地の中に池が存在する。その東には蓮成寺、遮那院が並ぶ。図10は図9に描かれた三千院門前の道の西側から北へと続き、勝林院寺地の南手前に律川が描かれる。勝林院の東には赤色で御陵の土地が

示される。図中に示される勝林院の寺地は他の寺院と比較して大きいが、これは勝林院本堂のほか、普賢院、理覚院、宝泉院という僧坊を含んでいるからであろう。逆をいえば、勝林院は大原地域の中で魚山大原寺として多くの僧坊をもつ有力な寺院であったことがうかがえる。

さて、先述した図9に描かれている荒蕪地の中に存在する池であるが、この場所は三千院、来迎院の寺地を示した図11 明治44年「三千院・来迎院境内編入の図」を参照すると、三千院境内から呂川をはさんで南の三千院所有地に当たる。図11は池の部分は所有地として示されていないが、令和2年(2020)時点で池の管轄は三千院であるため、明治期にも実質的な管理を行っていたのは同寺だと推測できる。この池と周辺地域について前章で述べたように令和2年2月26日、同3月18日に測量及びフィールド調査を行った。そこでは図9に示される池をはじめ、池南側の林から蓮成院、遮那院より東南部にかけて調査をし、石垣の痕跡や出土遺物を発見している。また池の周辺には東部より水を引いてきた痕跡がある。流路は自然のものではなく人為

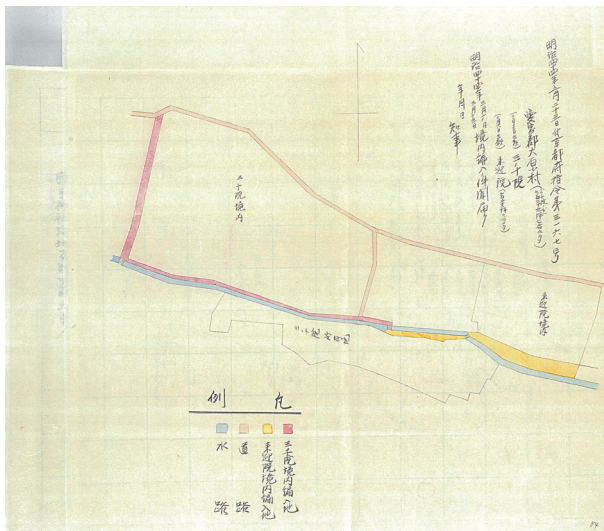


図11 「三千院・来迎院境内編入の図」

的に造られた痕跡がある。前章にて池が坊に伴う施設との見解を示したが園池などとして掘られた可能性がある。このことから、「官有地籍図」や図8『京都府山城国愛宕郡大原村 魚山之総図』には示されていない三千院よりも南側の地域に魚山大原寺を形成する僧坊または生活空間の一部が存在したのではないかということが推測される。『都名所図会』にある「昔ハ坊舎一百余宇有しなり」との記述は、呂川より北、律川をこえて勝林院までの大原東部を形成する土地では僧坊100余りが建つには狭いが、今回の調査により三千院より呂川をはさんで南側の土地に僧坊が広がっていた可能性が出てきた。今後、三千院南側の池を含めた土地の調査を進め、「坊舎一百余」についての痕跡であるか検討することが課題である。

(浅子)

むすび

今回紹介した成果を要約して、本稿のむすびとする。

- 1 宝泉院北方の平坦地は時期不明であるが、勝林院境内の北半部に営まれた坊の一角と推定する。
- 2 呂川の南側尾根で発見した遺構・遺物は、来迎院に属していた坊のものとする。遺構の成立年代は平安時代後期以降と考える。完成したのは鎌倉時代末から室町時代であろう。
- 3 呂川南尾根の遺構は、呂川に面するものと尾根上のものとの2分割する必要を感じる。すなわち現在呂川沿いに蓮成院が位置し、道路の共有などもあり来迎院・浄蓮華院と同一空間を創りだしている。尾根上の坊も来迎院に属していたと考えるが、立地環境や坊の配置や規模から、北の尾根上とは異なって生活空間であったと推定する。
- 4 池は灌漑用のため池ではなく、小規模であるが園池として掘られたと考える。時期は平安時代後期から鎌倉時代に成立したと思いたい。

以上粗雑な考察を羅列した。まだまだ大原寺の実態解明まで遠い。今後も調査を継続し、その真実に迫りたいと思っている。

注釈

- (1) 鈴木久男「大原の里と勝林院」『京都を学ぶ【洛北編】』ナカニシヤ出版 2016 年
- (2) 秋里籬島『都名所図会』天明 6 年 (1786) 再板本 国際日本文化研究センター所蔵
- (3) 明治 4 年 (1871) に梶井門跡が洛中より大原に移転し、三千院と改称された。極楽院は三千院の一つとなり、明治 18 年に往生極楽院と改称された。
- (4) 秋里籬島『拾遺都名所図会』天明 7 年 (1787) 国際日本文化研究センター所蔵
- (5) 山本泰順『洛陽名所集』巻之七 万治元年 (1658) 国立国会図書館所蔵 (国立国会図書館デジタルコレクションより転載 [URL <https://dl.ndl.go.jp>])
- (6) 磯田平兵衛『出来齋京土産』巻之五 延宝 5 年 (1677) 早稲田大学図書館所蔵
- (7) 『名所都鳥』元禄 3 年 (1690)
[日本古典籍データセット参照 URL <http://codh.rois.ac.jp/pmjt/>]
- (8) 水雲堂『京羽二重』宝永 2 年 (1705) 京都府立京都学・歴史館所蔵
- (9) 白慧『山州名跡志』正徳元年 (1711) 国立国会図書館所蔵
- (10) 『京都府山城国愛宕郡大原村 魚山之総図』合資会社名古屋光彩館 明治 32 年 (1899) 国土地理院所蔵
- (11) 社寺境内外区別取調 3-65 添付「三千院・来迎院境内編入の図」地理掛 京都府立京都学・歴史館

調査日誌抄

- ・ 2020 年 2 月 26 日 (水) 調査者：鈴木久男、浅子里絵、眞館祐輔、内藤唯 内 容：遺構・遺物の分布状況の確認と略測図の作成
- ・ 2020 年 3 月 18 日 (水) 調査者：鈴木久男、天野玄雄、浅子里絵、眞館祐輔、内藤唯、平木可奈恵、山口翔大 内 容：遺構・遺物の分布状況の確認
- ・ 2020 年 3 月 20 日 (金) 調査者：鈴木久男、西森正晃 内 容：遺構・遺物の分布状況の確認

